Pichari ～ピチャリ～
七飯町歴史館だより
第50号

ななえ古写真物語
VOL. 50

赤松並木の歴史

ルーツは佐渡？

昭和４７年

鳴川地区

早いもので、この古写真物語も５０号となってしまった。記念すべき節目にふさわしい七飯町らしい素材がないかといろいろ考えた挙句、やはり赤松並木しかないだろうと思い、上の写真を選んでみたが、古写真とするには少し新し過ぎたかもしれない。

過去に本紙で、国道5号（札幌本道）の道路史には触れたことがあったが、赤松並木の歴史について触れていなかったので、今回紹介したいと思う。

七飯町の自慢の景観の一つである赤松並木。現在の国道５号沿いに桔梗から峠下地区までの約１４㎞に及んでアカマツほかおよそ1,400本が植栽された並木は「赤松街道」の名称でも知られている。

国道5号沿いに並木として植栽されたのは、明治９年に明治天皇が七重村にあった七重官園（国営の農業試験場）をご巡幸されるに際し、職員が奉迎の意を表す為に、官園のまわりや新道（国道５号）にマツを植えて記念したのが始まりといわれる。その様子を見た黒田清隆の指示により、翌春（明治10年）から、さらに苗木を植え、現在のような景観になったといわれる。これが、赤松街道の始まり・・・。

では、アカマツの育成はいつから行われていたのか？というと、さらに歴史は江戸時代末期まで遡る。

安政４（1857）年に箱館奉行支配組頭だった河津三郎太郎が、これまで奉行所で管理していた七重村の土地の一部を開墾し、苗木や薬草などを育成しこれを御薬園と称した。これが七重村御薬園と呼ばれるものである。翌年、栗本瀬兵衛（鋤雲）が御薬園を掌握したことでさらに発展し、スギ・マツ・クワ・ウルシ・コウゾなどの苗木育成や朝鮮人参を栽培するようになった。

この時育成したアカマツの種は、佐渡から入手したと、彼の記した『箱館叢記』で明らかになっている。さらに、育成した苗木は、五稜郭周辺や箱館から五稜郭に至る道沿いに列植したり、箱館から桔梗を経て、七重村に至る道にも遍く植えたことまで記録されている。

御薬園で育成していた苗木が七重官園に引き継がれ、明治天皇ご巡幸を記念して植えられたことを知る人は多いかもしれないが、江戸時代からアカマツの植栽が行われ、七飯町外にも多く並木として植栽されていたことを知る人は少ないかもしれない。

日進月報 <2012.1>

24日

夜の博物館第２回目の講座は「農工共栄の志」と題して、男爵いもの生みの親、川田龍吉の生涯について学びました。

川田龍吉は男爵いもを広めた他にも、英国に留学して造船の技術を学んだり、日本初のオーナードライバーになるなど、好奇心と行動力に溢れた人物だったようです。

当館学習サービス室にも川田男爵の本がありますので、読んでみてはいかかでしょうか。

24日

ジュニア探検クラブで竹スキー作りに挑戦しました。

まず、なたとカナヅチを使って、竹を割ります。見慣れない道具と音に、不安な表情を浮かべていましたが、竹が見事に真っ二つに割れる瞬間は、気分爽快といった様子！次に、竹の側面を彫刻刀で滑らかになるまで削った後、竹の先端を削っていきます。これは、竹をゆでた後に曲げて形づける時に、曲げやすくするため。この作業が一番大変で、１～２時間、ひたすら削っていました。きっと、筋肉痛になったのでは…。

残念ながら実際に滑る時間はとれませんでしたが、滑り心地はどうだったのかな？

25日

ふぁみりーでぃみゅーじあむで、恵方巻き作りをしました。いくつかの具材は事前に準備していたので、卵焼きときゅうりを切る作業をしてもらいました。卵はこして数回に分けてフライパンに流し込み、焦らず丁寧に巻いていくのがきれいに仕上げるコツです。

まきすの上にのりを敷き、酢飯の上に具材を並べてくるくる巻くと…たくさん福を呼び込んでくれそうな、ボリュームたっぷりの恵方巻きが完成したのでした。

3月の予定

1	木	
2	金	
3	土	パネル展OPEN予定
4	日	
5	月	
6	火	
7	水	夜の博物館
8	木	
9	金	
10	土	
11	日	冬の探鳥会
12	月	
13	火	
14	水	
15	木	
16	金	
17	土	
18	日	
19	月	
20	火	
21	水	
22	木	パネル展CLOSE予定
23	金	
24	土	ジュニア探検クラブ
25	日	
26	月	
27	火	
28	水	
29	木	
30	金	
31	土	

※3月の休館日はありません。

春らしく、華やかに…

３月３日まで、常設展示室に雛人形を飾っています。春らしい、華やかな雰囲気になりました。飾って下さった友の会の皆さんに感謝いたします（A）

編集後記　～tawagoto～

「土脉潤起（つちのしょううるおいおこる）」とは、日本古来の暦である二十四節気七十二候の中で、「雨水」という節気の初候に相当します。雨が降り、土に湿り気が含みはじめるといった意味でしょうか。

最近、このような季節の移ろいを風情にとらえる表現が素晴しいと再確認しているのだが、ここ北海道では、まだ白銀世界。春の訪れを心待ちしている日々を過ごしています。　（やまだひさし）

Pichari ～ピチャリ～
第50号
平成24年2月20日　発行

七飯町歴史館
〒041-1193　亀田郡七飯町本町６丁目１－３
電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182
E-mail : rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp